

## まずは研究者の多い分野から 学会誌の活性化に関する提案

小城 春雄

鳥学会誌に殆ど投稿せず、大会にも参加せず、極めて不真面目なノンポリ会員である私に、鳥学ニュース編集者から海洋生物学、水産学の立場から意見をしようとの依頼を受け、実は面喰らっているのが実情です。

一昨年（1993年）の松山での大会に初めて参加し「海鳥類によるプラスチック粒子取り込み」についてシンポジウムで発表させて戴いたとき、丁度山岸会長が選出され、その後の鳥学ニュースでは会長の鳥学会の活性化についての所信表明が記載され大いに賛同しました。ただ大会に参加してびっくりしたのは、年一度の大会のシンポジウムと云う、いわば学会が内外に強力にアピールすべき重要なイベントであるにも拘わらず、シンポジウムと他の会合が同一大会でありながら平行して開催されていたこと、そしてその後の学会誌に図表を最小限度加えたシンポジウムの要旨が掲載されなかったことでした。私見ですが、これは今後何とか改善できないものでしょうか。嬉しかった事は、その後の鳥学会誌に東京湾の水鳥によるプラスチック粒子取り込みの論文が発表されたことでした。



私のこれまでの海鳥研究は、海鳥類の分布、移動、食性、機能形態的研究と云うように、繁殖期以外の外洋生活史の解明に主眼をおいてきました。そのため毎年漁船や調査船に乗船して混獲される標本を集めたり、目視観察をしたり、といった事を20年以上行ってきました。毎年の洋上調査は4月より10月に及ぶため、鳥学会には参加できなくなる事情もあるにはあったと言いつけておきます。

海鳥類の分布移動は、其の生息している現場の海洋構造に固有な海洋学的小よび生物学的特性と同調しています。従って参加する学会は、海洋の海鳥類を取り巻く生物学的および物理学的情報が多く得られる方を選択してしまいます。そのため、海洋学、プランクトン学、魚類学、水産海洋学、水産学、環境科学等の学会、そして極地研のシンポジウム等に参加してしまいます。

近年外洋性海鳥類は国際漁業との関連から主として水産庁が全面的に取扱官庁として機能し、環境庁や文化庁は蚊帳の外におかれています。国内の海鳥に関しての保護問題も重要な場面となると水産業との軋轢となり問題はいわば棚上げとなります。平成6年度より水産庁は希少水生生物保存対策試験事業を発足させ水鳥部会を設け、まずわが国で繁殖する8種の海鳥種について資源評価しました。海鳥類は海洋生態系において重要な構成員であるにも拘わらず、またわが国の水産業は世界をリードする地位にありながら、海洋生物研究、それも産業的背景がない生物種となると異常なほど研究者が少なく、また働く場所のないのが現状です。この現状は陸棲鳥類の比ではありません。現在の日本で海鳥類を専一に研究できる立場にある研究者は五指に満たしません。これも論文数の少ない原因です。

鳥学会誌を見ると、いつも掲載論文が極めて少なくびっくりするのは私一人では無い苦です。年度

大会での行動観察の多さに比しても奇妙な感じがします。これだけ発表者数が多い分野であるのなら、まずこの分野の投稿論文を増加させる努力が早急に必要に気がします。自由集会で注目されているコアジサシについても同様でしょう。活性化の一手段としては、研究者が多く研究が活発な分野の論文を溢れんばかりに掲載することだと思います。学会の現状をいくらか批判したところで、直ちに改善できることとできないことは自ずからあるはずですし、現段階でできることを可能な限り発展させることと、それによる誘引効果を期待する以外にはないと考えます。ここで大切なことは、大会では鳥学の発展に貢献すべき基礎的分野（主として生理、形態、分類、分布、進化、年齢形質）、そして先端技術の応用分野（生化学、リモセン、バイテレ、数理解析、新測定機器、地球科学）等の発表を必ず確保する姿勢と努力が必要でしょう。この分野は非学会員の参加も容認し、会長以下各役員の人脈とコネを最大限に利用して人選してはいかがでしょうか。鳥学研究に関連する他分野の情報も多様に得られることが、大会開催に当たっての大切な哲学であると考えます。

如何にしたら投稿論文を多くできるか、という問題になります。このことに関しては、これまでも関係者が努力を払ってきた過程があるにも拘わらず現在の状態があるのですから一層難しい問題です。大会の総会などで、これまでの数年間にわたる投稿論文数と受理論文数、審査の過程等を紹介し、さらに学会誌は会員全員の積極的な姿勢により支えられていることを強力にアピールすることから始めるより他はなさそうです。また大会などで、これはと思う発表者には積極的に投稿を勧誘し、強制的ではないにしろOKの言質を取って、投稿する気持ちを喚起させる働きかけも必要なのかもしれません。

これは日本の研究者全般の傾向でしょうが、これはという論文を書いた場合には、海外誌へ投稿してしまいます。海鳥研究もやはり海外誌に戦場が形成されています。また、Pacific Seabird Group (PSG) のシンポジウム（毎年1月に米国で開催され、参加者は常に200人以上）に参加すると、得られる情報の多さは日本では想像できない程で吃驚します。私は過去4回参加しましたが、近年やっと鳥学会会員も参加し始めました。主要課題についてはプロシーディングが出版されますが、最新号では私のほかに綿貫豊氏も著者として名を連ねています。日本では山階鳥研報が伝統的に海鳥の論文を収集していますが、これは編集者の努力が有ったのことと思います。

先ず、現在の鳥学会で優勢な分野の論文を学会誌に多く掲載することから活性化を開始しては如何でしょうか。

(北海道大・水産・生物海洋学講座)

## 関連学術会議

- 6月 2～ 4日 マダガスカルシンポジウム（シカゴ：本号）
- 7月 31～8月 3日 アメリカ生態学会第80回年会議（スノーバード・ユタ州・本号）
- 8月 10～ 17日 第24回国際行動学会議（ホノルル：no.53）
- 8月 20～ 25日 第7回ヨーロッパ生態学会議：生態プロセス－現状と展望（ブダペスト）
- 8月 27～ 30日 第42回日本生態学会大会（岩手大：本号）
- 9月 1～ 3日 日本鳥学会大会（早稲田大：案内参照）
- 9月 4～ 8日 第5回ヨーロッパ進化生物学会会議（エディンバラ）
- 9月 8～ 12日 コロニー性水鳥学会と太平洋海鳥グループの1995年合同会議

(ビクトリア・カナダ：本号)

関連分野の学会大会・シンポジウムに関する情報をお知らせください（切：2カ月前）

## 種生物学会シンポジウム印象記

## ——— 種子散布の問題を解くための鍵としての鳥類研究者への期待

福井 晶子

このシンポジウムの会場は三田という、地震による被害が大きかった街からそれほど遠くない場所にありました。当初、交通が寸断されていたため、開催が危ぶまれましたが、幸い会場の大学セミナーハウスは被害を受けていなかったので、実行委員の方々の御尽力により、予定どおり行なわれました。シンポジウムは3日間にわたって行なわれ、初日の夜にプレシンポジウムがあり、2日目が系統分類学、3日目に種子散布についての発表がありました。種生物学会の会員の多くは植物の研究者であり、したがって、多くの講演は植物についての内容でした。私は「ヒヨドリによる種子散布」という題で種子の滞留時間を中心に発表しました。滞留時間は種子にとって運ばれている時間です。ヒヨドリを用いて、17種の果実の滞留時間を測定した結果、種子および果実の大きさと滞留時間の長さの間に負の相関が見られました。勿論、滞留時間が長くても散布者の行動によって散布距離が短くなることもあるかもしれませんが、滞留時間の短い種子は運ばれる時間が短いので、滞留時間の長い種子よりも遠くへ運ばれる可能性は低いと思われる。少なくとも滞留時間が長いほど親植物の直下に散布されにくく、それだけ種子散布に成功する可能性が高いと言えます。ですから、滞留時間は植物にとって種子の散布距離を決める重要な要因であり、長いほうが望ましいという性質を持っています。

一方、種子の滞留時間は、果実を食べる鳥にとっては食べ物の処理コストの一部です。採餌において、ベネフィットはその食べものの栄養であり、コストは食べ物の処理時間です。ヒヨドリの食べている果実のうち4種、ユズリハ、ハナミズキ、クスノキ、ガマズミについて調べた結果、ガマズミの栄養価が著しく低い値を示すことがわかりました。また、筑波大学内での観察で、ガマズミはなかなか食べられずに長いあいだ親植物の上に残されてい

るのが観察されました。このことは、ヒヨドリの好みが果実の栄養価に左右されることを示しています。

植物は鳥にとって魅力的でたくさん食べてもらえるような果実をつくっていると言われていています。鳥が果実を食べる際に問題になるコストは、探索時間、飲み込み時間、消化時間(種子の滞留時間)の3つです。たとえば、鳥にとって目立つ色の果実は鳥の探索の助けになります。また、食べやすい大きさの果実を食べていることもわかっています。ここで問題にしている滞留時間については、Sorensen (1984) が滞留時間の短い果実のほうが好まれるという実験結果を報告しています。つまり種子の滞留時間は、鳥にとっては採餌コストであり、短いほうが望ましいのです。

種子の散布者と果実の関係は共生的な面が強調されることが多いのですが、このように、滞留時間をめぐっては利益の対立がみられます。最近、生物の多様性が注目されていますが、そのなかでも動物と植物の相互関係の研究は、新たな生物間の相互作用を検出し、多様性を説明する手掛かりとして重要な役割を果たしつつあります。ここに示したような、一見、共生的な関係のなかに潜んでいる対立関係に注目することも新たな相互関係の検出やメカニズムの解明のために重要な役割を果たすと思われる。

このような相互関係の関心の高まりにともない、1991年鳥学会の「鳥と木の果の共進化」という題で行なわれたシンポジウムをはじめ、多くのシンポジウムが開かれてきました。そういった集まりのなかでも種子散布は常に取り上げられ、なかでも鳥類が種子の散布者として重要であることは、すでに共通の認識となっており、したがってそれだけ、種子散布の研究者から種子散布の問題を解くための鍵としての鳥類研究者への期待も高まっています。1991年のフェノロジー研究会に上田恵介

先生が招かれたのは、植物の研究者からの需要をよく表している例でしょう。

いままでのシンポジウムでは、植物の研究者と動物の研究者がお互いに情報交換するといった性格が強かったように思います。しかし、今回の種生物学会のシンポジウムに出席し、動物と植物の研究者が互いに調査後の情報交換をする段階から、共同で調査し、共同で問題に取り組む段階に移行して来ていると感じました。食物資源である果実が鳥の個体数の変動や繁殖、分散などに重要な役割を持っていると指摘されていますが、温帯の果実食鳥に

ついては、まだまだ不明な点が多く残されています。この問題に取り組むためには果実の生態を同時に調査する必要があります。しかし、それは個人の能力をはるかに越えてしまうでしょう。断片的な情報のやりとりだけでなく、植物の研究者と共生的な関係を結ぶことで、新たな発展を手に入れることができるのではないのでしょうか。ただし、共生的な関係のなかには、利益の対立が潜んでいるかもしれません。

(北海道大・低温研)

## 第9回「大学と科学」公開シンポジウム

### 「地球共生系 —— 多様な生物の共存する仕組み ——」の報告

吉田 保志子

去る1995年1月28日(土)・29日(日)に、有楽町朝日ホールにおいて第9回「大学と科学」公開シンポジウム 地球共生系が行われた。開場は広く、2日間ともほぼ満席であった。人数はおそらく1000人を超えていたと思われる。どの講演においても専門用語は避けて美しいカラースライドや図を豊富に使った分かりやすい説明がなされたが、内容は既に発表されたものも多くやや物足りない印象があった。参加者が様々な範囲から集まっていることを考えれば避けられないことであろう。研究内容を分かりやすく、しかも面白く紹介する演者の方々にはさすがと思わせられた。

1日目はまず京都大学の川那部浩哉氏の「地球共生系とはなにか?」という総合講演があり、次に東京大学の松本忠夫氏の司会で「小さな共生系の世界：その成り立ちを探る」というテーマのセッション1が行われた。ここでは東京大学の石井統氏の「細胞内共生の起源と進化：分子生物学からのアプローチ」、山口大学の山岡郁雄氏の「シロアリと腸内微生物との共生」、佐賀医科大学の山村則男氏の「寄生から共生へ：垂直感染と廃物利用」の3講演が行われた。昆虫が持つ細胞内共生体のリボソームRNAの比較によって、昆虫と細胞内共生体の進化の歴史を知ることができること、腸内の微生物との共生でセルロース消化を行う

シロアリ、相利共生の進化は垂直感染率(親から子への感染)の増加や互いの排泄物の利用に関係して生じることなどが紹介された。続いてセッション2は「生物の複雑な相互作用を浮き彫りにする：実験的アプローチ」というテーマで、北海道大学の大串隆之氏の司会で4講演が行われた。京都大学の高林純示氏の「種間関係を多様化する間接作用・ボディーガードを雇う植物」では、ダニに加害された植物は、ダニを捕食する捕食性ダニを誘引する物質を出し、これらの生物の間に複雑な化学ネットワークがあることを示した。筑波大学の藤井宏一氏の「マメ・マメゾウムシ・寄生蜂系：その種間相互作用と安定性」、愛媛大学の川端善一郎氏の「多種共存システムを造る：水系マイクロコスモス」では、複数種の昆虫を組み合わせて飼育したときの系の安定性は組み合わせによって変わってくること、細菌・原生動物の共存系において少ない種の間にも様々な相互関係が成立していることが紹介された。京都大学の古澤巖氏は「植物ウイルスの宿主への適応戦略」について講演し、植物ウイルスが新しい宿主を開拓するときには突然変異が起こっている可能性が高いことを示す実験を紹介した。

2日目のセッション3は「野外生物群集を丸ごと扱う：多種共存の仕組み」というテーマ

で、京都大学の武田博清氏の司会で4講演が行われた。京都大学の井上民二氏の「熱帯雨林の林冠部における共進化」では、熱帯雨林においては植物と送粉者や種子散布者との関係のような、多くの相互に依存しあった共進化系が種分化を促進し、多様性を生んできたことが指摘された。東北大学の西平守孝氏は「サンゴ礁における多種共存の筋道」について多くのカラースライドを使ってサンゴが多くの生物に住み場所を提供して多様な共生関係が成立していることを示した。京都工芸繊維大学の山岡亮平氏は「昆虫の小宇宙と化学情報物質連鎖」について講演し、アリにおいて情報化学物質が、種内、種間で多様な働きをしていることを紹介した。東北大学の箕浦幸治氏の「大絶滅と大進化：生物多様性の古生物学からのアプローチ」では、地球環境の大規

模な変遷と生命の歴史を大きくまとめて示されたのが興味深く、生命の進化は偶然に支配されてきたことが述べられた。

パネルディスカッションは司会の立命館大学の遠藤彰氏と6人のパネリストの間で各セッションの内容をふまえて活発な討議が行われ、なかには分子生物学から生態学に対して、興味深い話を支持するしっかりしたデータをもっと取ってほしいという提言もあった。その後会場からも質問を募ったが、まとまりきらないうちに時間切れとなってしまったのは残念であった。最後に京都大学の安部琢哉氏の司会でセッション4が行われ、京都大学の東正彦氏の「多様性の生態学：その構築をめざして」と川那部浩哉氏の「本講演会のまとめと展望」でシンポジウムが締めくくられた。

(東京大・野生動物)

## ハイテクノロジーと鳥の生態

### ——「鳥類内分泌研究会」の報告と紹介

石 居 進

去年の秋おそく、ある会で野鳥の会研究センターの福井和二さんと、バイオテクノロジーを使って研究している中国や日本の家禽学者達との間で、有用な意見の交換が行なわれた現場に居合わせた。(少なくとも私には)非常に面白い話であったし、異なった分野の人達との交流の大切さを知ったように思った。ちょっと、どんな話だったかを紹介したい。

その会では中国の北京農業大学の李賛東助教が、アヒルの体外孵化の話をしておいでだった。脊椎動物では発生の比較的初期に、将来生殖細胞になる細胞(始原生殖細胞)が体内をうろろしている時期がある。そこでウズラの胚からこの細胞を血液と共に取り出して、ニワトリの胚の血管に注入する。そうするとニワトリの胚がやがて性成熟すると、その精巣や卵巣は部分的にウズラの精子や卵を含むことになる。このようにすればニワトリにウズラの卵を生ませることができる。鳥の種内や種間でこのようなことが可能になってきている。そこで、李さんはこれをアヒルで試みようと考えた。そのためにまず、アヒル

の胚の人工孵化をしようとした。ところが、アヒルの胚はニワトリなどと違って孵卵器に入れて時々転卵をした程度では育たないという。何時間おきかに、温度を下げて、卵の外に霧を吹いてやる必要があるというのである。彼女のこの話に日本の家禽学者達から何でそんな必要があるのかという質問が出た。もちろん、彼女にも他のそうそうたる日本の家禽学者達にも答えられない質問であった。

そこに登場したのが福田さんである。誰かがこれはアヒルの先祖のマガモの生態と関係があるかも知れないと言い出して、福田さんにはうかがおうということになったのである。鳥学会の会員の皆様にはもうお分かりと思う。福田さんは「マガモは雌しか抱卵しない。そこで、何時間かに1回は抱卵をやめて巣を離れ、餌を食べに行く、そして帰ってきたときに、おそらく下面が濡れた体で卵の上に座る可能性が高い」とおっしゃったのである。李先生も日本の家禽学者の人達も全員、なるほどと納得して、自然の仕組みの微妙さに感嘆していた。

この鳥類内分泌研究会とはどんな会かを紹介

したい。この会は20年くらい前に主として鳥類のホルモンの研究をしている動物学者と農学者が集まってつくった。研究会の創設の頃は名古屋大学の中条先生、東京大学の小林英司先生が会の重鎮としておいでになった。今では農学者では岐阜大学で長らく研究されていた家禽学の権威の田中克英、田辺雄一の両先生、日本大学の今井清先生、名古屋大学の島田孝司先生、九州大学の藤原昇先生らが活躍されておいでだし、動物学者では和田勝先生、若林修一先生らが中心となって活躍しておいでのなる。1年に1度集まって研究の話をしあう。最近、家禽学者の方々も野生の鳥類

に興味をお持ちになってきたことや、和田先生が野鳥の会研究センターの福田先生と共同研究をしておいでだったことなどから、福田さんがこの2、3年出席して下さっていたのである。

去年は信州大学の小野珠乙先生のお世話で、信州高遠の青年の家という所で泊まりがけて開かれた。今年は三重大学農学部の脇田正彰先生のお世話で星野貞夫教授の定年を記念して開かれる予定である。どんな内容の話があるか、前もって分かたら、次のニュースでもお知らせ出来ればと思っている。

(早稲田大・教育)

## 日本鳥学会 1995 年度東京(早稲田)大会のご案内

会 期：1995年9月1日(金曜日)より3日(日曜日)まで

会 場：東京新宿区西早稲田 早稲田大学国際会議場

日 程：

	午前の部 (9:00-11:30)	午後の部 (1:00-5:00)	夜の部 (6:00-8:00)
第1日目	各種委員会と自由集会	シンポジウム	評議員会と自由集会
第2日目	口頭発表	総会と特別講演	懇親会
第3日目	ポスター	口頭発表	自由集会

大会参加費(講演要旨込み)：

7月10日まで 一般 3500円 学生 2500円

7月11日から 一般 4000円 学生 3000円

懇親会費 4500円

シンポジウム：「絶滅に瀕した希少鳥類」

座長：樋口宏芳、演者：近辻宏掃、安座間安夫、石居 進

討論者：石田 健、斎藤 勝、渡辺綱男

特別講演：「野鳥の行動とホルモン」(仮題)(演者：John C. Wingfield)

講演申込み締切：7月10日

以上のような予定で本年度の大会を行いたいと思っています。早稲田の地で、皆様から色々な鳥の話のうかがえるのを、準備委員一同楽しみにしております。参加者にはシギ、チドリを中心とした東京付近の探鳥案内、早稲田界隈の安くておいしい食堂案内、飲み屋地図、散歩案内などもさし上げる予定です。参加申込書や詳しい案内は別紙をご覧ください。大勢の方々のおいでを心からお待ちしております。

(大会準備委員長：石居 進)

連絡先：〒169-50 新宿区西早稲田早稲田大学教育学部生物学教室

石居 進 Tel 03-5286-1519 Fax 03-3207-9694

E-mail : susumu @ mn. waseda. ac. jp、又は Nifty Serve の PAHO1514

大会案内・申込書は本号に同封されていますので、お見逃しないうお願いします。同封されていないときは、上記連絡先までご請求下さい。

## 学術集会のお知らせ

### マダガスカルシンポジウム

1995年6月2日～4日にシカゴのフィールド博物館 (The Field Museum) で、マダガスカルシンポジウム (Madagascar Symposium) …マダガスカルにおける自然および人のコントロール下での環境変化 (Natural and Human-induced Change in Madagascar) が開催されます。

お問い合わせ : Bruce Patterson, Madagascar Symposium Coorganizer, The Field Museum, Roosevelt Road at Lake Shore Drive, Chicago, IL60605-2496, USA. E-mail : symposia@fmrnh785.fmrnh.org

### アメリカ生態学会第80回年会議

1995年7月31日～8月3日にユタ州のスノーバードでアメリカ生態学会第80回年会議 (Ecological Society of America 80th Annual Meeting) が開催されます。

お問い合わせ : Program Chair, Dr Jill Baron, National Biological Survey, Natural Resource Ecology Laboratory, Colorado State University, Fort Collins, CO 80523, USA.

### 日本生態学会第42回大会

日 程 : 1995年8月27日(日) から30日(水)

場 所 : 岩手大学人文社会科学部

参 加 費 : 8月10日受付分まで6,000円 ; 学生4,500円 (当日受付7,000円)

懇 親 会 : 5,000円

お問い合わせ : 〒020 盛岡市上田3-18-34 岩手大学人文社会科学部生物学教室気付  
日本生態学会第42回大会準備委員会 TEL : 0196-23-5171内線  
2294(牧), 2811(竹原), FAX : 0196-54-2289(大会準備委員会あて)

### コロニー性水鳥学会と太平洋海鳥グループの1995年合同会議

1995年9月8～12日にカナダのビクトリアでコロニー性水鳥学会と太平洋海鳥グループの1995年合同会議 (Colonial Waterbird Society and Pacific Seabird Group Meeting 1995) が開催されます。テーマは「個体群安定の行動メカニズム」です。

お問い合わせ : Rob Butler, Pacific Wildlife Research Centre, Canadian Wildlife Service, PO Box 340, Delta, BC V4k 3Y3 Canada.  
TEL : [60] 4-946-8546, FAX : 4-946-7022,  
E-mail : butlerr@cwsvan.dots.doe.ca

### 第13回動物の繁殖に関する国際会議

1996年6月30日～7月4日にオーストラリアのシドニーで開催されます。絶滅危惧種の保護や有害動物の数の制御などがテーマに含まれます。

お問い合わせ : ICAR 96 Congress Secretariat, GPO Box 128, Sydney, NSW, 2001, Australia. TEL : [61] 2-262-2277, FAX : 2-262-2323

### 第6回国際行動生態学会

1996年9月29日～10月4日にオーストラリア・クイーンズランドのオーストラリア国立大学 (the Manning Clark Centre, Australian National University) で第6回国際行動生態学会 (VIth International Behavioural Ecology Congress) が開催されます。

お問い合わせ : Andrew Cockburn, Botany and Zoology, Australian National University, ACT, 0220, Australia. E-mail : ieb6@anu.edu.au

お知らせ

## 研究助成のご案内

公益信託増進会自然環境保全研究活動助成基金

- 対 象 A) 絶滅の恐れのある小動物の保護・増殖に関する調査・研究。  
B) 絶滅の恐れのある小動物の保護に係る、生息環境保全および環境復元・回復に関する調査・研究
- 応募資格 小中高等学校の教員、各学会等から推薦を受けた者など。
- 助成金の金額 一件50万円、5件以内
- 応募締切 5月31日
- 助成金交付日 7月31日
- 助成期間 原則として、交付日より1年間
- 問い合わせ先 〒133 東京と文京区湯島2-29-3  
財団法人自然環境研究センター内  
公益信託増進会自然環境保全研究活動助成基金事務局

鳥学会からの推薦を希望される方は鳥学会事務局まで早急にご連絡ください。

## お 知 ら せ

### 【編集委員会】

○学会誌の投稿論文の投稿先が以下のように変わりました。ご注意ください。

〒062 札幌市 豊平区 羊ヶ丘 7番地 農林水産省 森林総合研究所  
北海道支所 鳥獣研究室 松岡 茂 宛

### 【事務局】

- 4月5日に本年度の第1回常任評議員会が東大で開催されました(出席者:阿部、藤巻、藤岡、樋口(広)、山岸、黒島(事務局))。
- 4月14日に第2回選挙管理委員会が大阪市大で開催されました(出席者:江崎、樋口(行)、和田、黒島(事務局))。初めての会長選挙です。おって選挙告示が送られるはずですので、よくお読み下さい。
- 三富一裕氏から鳥学基金へ5,000円の寄付を頂きました。紙面を借りて感謝します。
- 中村 司氏から鳥学基金へ200,000円の寄付を頂きました。紙面を借りて感謝します。
- 本学会も加入している「自然史学会連合」の設立総会が6月3日に14時から16時まで、国立科学博物館分館の研修研究棟4階講堂で開催されます。参加自由ですので、参加希望者で詳しい内容をお知りになりたい方は、事務局までお問い合わせ下さい。

## 鳥学ニュース No.55

1995年5月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪立大学理学部動物社会学研究室気付

TEL. 06-605-2607 FAX. 06-605-2522

発行人 山岸 哲 印刷所 丸二印刷

編集 江崎保男・西海 功